慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『ジャップの収容所』紹介：第VII部
Sub Title	Jap camp : translation and annotation of selected interviews with citizens of Owens Valley : part VII
Author	池田, 年穂(Ikeda, Toshiho)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	2006
Jtitle	共立薬科大学雑誌 (The journal of Kyoritsu University of Pharmacy). Vol.1, (2006. 3) ,p.49- 68
JaLC DOI	
Abstract	During WWII, some 110,000 Japanese-Americans, two-thirds of whom were American citizens, were interned in ten 'Relocation Camps.' First settled and the most famous, Manzanar camp was constructed in Owens Valley, California. So far, quite a few interviews with Japanese-American internees have been conducted. It seems, however, to be rather difficult to find documentation of interviews with 'ordinary' Caucasians who lived in Owens Valley during the period. The California State University Fullerton Oral History Program, officially inaugurated in 1967, keeps the tapes and its documentation of nearly 2,000 interviews. As to Japanese evacuation and relocation, Prof. Arthur A. Hansen and his staff began to concentrate on it in 1973. Their efforts inevitably included the interviews with Caucasians living in Lone Pine and Independence, both situated in Owens Valley and only several miles from Manzanar camp. The text used for translation is Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley, 1978 & 2004, CSUF. The title of the book was originally Jap Camp and was changed to the title above due to opposition and charges from a group of Japanese-American militants. Three interviewees will be introduced in this article: A female involved in the construction stage of the camp. A Caucasian man and his wife of Chinese descent. Readers might refer interest to another book, Roger Axford, Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out, 1986, which contains interviews with Japanese-American internees and whose translation was published by me in 1991.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=jkup2006_1_049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ジャップの収容所』紹介

—第Ⅶ部—

Jap Camp—Translation and Annotation of Selected Interviews with Citizens of Owens Valley

—Part Ⅶ—

池田　年穂
Toshiho IKEDA

During WWⅡ, some 110,000 Japanese-Americans, two-thirds of whom were American citizens, were interned in ten 'Relocation Camps.' First settled and the most famous, Manzanar camp was constructed in Owens Valley, California. So far, quite a few interviews with Japanese-American internees have been conducted. It seems, however, to be rather difficult to find documentation of interviews with 'ordinary' Caucasians who lived in Owens Valley during the period.

The California State University Fullerton Oral History Program, officially inaugurated in 1967, keeps the tapes and its documentation of nearly 2,000 interviews. As to Japanese evacuation and relocation, Prof. Arthur A. Hansen and his staff began to concentrate on it in 1973. Their efforts inevitably included the interviews with Caucasians living in Lone Pine and Independence, both situated in Owens Valley and only several miles from Manzanar camp.

The text used for translation is *Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley*, 1978 & 2004, CSUF. The title of the book was originally *Jap Camp* and was changed to the title above due to opposition and charges from a group of Japanese-American militants. **Three interviewees will be introduced in this article: A female involved in the construction stage of the camp. A Caucasian man and his wife of Chinese descent.** Readers might refer interest to another book, Roger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out*, 1986, which contains interviews with Japanese-American internees and whose translation was published by me in 1991.

緒言　CSUF のオーラルヒストリー・プログラムについて

二十世紀に入って「録音」という技術が誕生したお陰で、インタビューが社会学的研究の重要な武器の一つとなった。

カリフォルニア州オレンジ郡に位置するカリフォルニア州立大学フラートン校（CSUF）のオーラルヒストリー・プログラムは、1966 年に講義形態として始まり、翌 1967 年に公的に発足している［山倉明弘は、『史學』第六七巻、第二号（1998 年 3 月）の 27 頁で、下記のように述べている。——日系アメリカ人の体験に関するオラルヒストリー採取が一九六〇年代に始まり、七〇年代にはいくつか優れた研究が発表されたというものの、一九八〇年代までは強制収容体験者自身の忌まわしい過去を忘れたいという抑制のおかげでオラルヒスト

リー採取の作業はそれほど進まなかった。その流れが劇的に変わるのが、一九八〇年代である。アーサー・ハンセンはカタルシスとなった出来事として、(一)戦時強制収容は米国政府の主張してきた軍事的必要性でなく人種偏見、戦争ヒステリー、政治的指導性の欠陥が原因であったという一九八二年のバーンスタイン委員会報告、(二)その報告に基づいてバーンスタイン委員会が一九八三年に行った国家謝罪と一人二万ドルの賠償の勧告の二つを挙げた。それ以来、続々とオラルヒストリー採取とそれを基にした研究が進んでいる。…池田註]。ケースによっては 20 時間にまで及ぶ 2,000 人近い個人とのインタビュー、延べにして 3,500 時間以上のテープが保管されている上、48,445 頁の文書として記録されている。インタビュイーらのインデックスも、504 頁にのぼる Shirley E, Stephenson, *Oral History Collection*, 1985（以下 OHC と略記）としてまとめられている。

その中でもとりわけ筆者の関心を惹くのは、1972 年にアーサー・A・ハンセンを長としてから、より精力的に進められる事となった、第二次大戦中の日系米人強制収容についてのインタビュー（『エスニック・スタディーズ』部門の中の「日系米人史」プログラムに含まれる）の数々である。筆者の調べでは、インタビュイーは 140 人（同席者は除く）、インタビューの時期も 1966 年から 1984 年にまたがっている。因みに年度毎、性別、日系かそれ以外かの別については下のようになる。

1966 年　6 名、　1968 年　1 名、　1971 年　6 名
1972 年　9 名、　1973 年 51 名、　1974 年 13 名
1975 年　3 名、　1976 年 17 名、　1977 年　1 名
1978 年 16 名、　1979 年　2 名、　1981 年　3 名
1982 年　3 名、　1983 年　4 名、　1984 年　5 名
（不詳 1 名、1981 年 3 名の内 1 名は 1982 年にもインタビューを受けている）

男　86 名
女　53 名
（不詳　1 名）
日系　90 名
非日系　50 名

ユニークな点は、当然と言えば当然と思えるが、日系米人のみでなく白人（コーケイジァン）、それも強制収容に直接には関わっていなかった一般市民へのインタビューが多数含まれている事である。第二次大戦中 10 あったリロケーション・センターの内、最も名高いのは、最初のセンターでもあったマンザナーであろう（それに次ぐのが、合衆国政府への「不忠誠者」を中心に再組織されたツールレークかと思う）。マンザナー収容所が事前の予告もないまま建設された地元のオーウェンス・ヴァレーの住民、ほとんどはそれ迄日系米人に関心すら抱いていなかった住民の反応をうかがうのに最適なインタビューが、無論インタビュイー各々の収容所や被収容者への意識や関わりにはかなりの深浅がありはするが、この CSUF のオーラルヒストリー・プログラムのコレクションの中にいくつも見出し得る。

ことオーラルヒストリーについては、最新のものが最善とは限らない。筆者も数次にわたり日米加三国でオーラルインクァイアリーを試みてきたが、年月と共に経験者が物理的に存在しなくなったり、知的に衰える例は多い。また、後年になって種々雑多な情報や知識が入ったものをあたかも自らの体験のように錯覚したり、自分の経験やその折の感覚を自分の人生のパースペクティヴの中にではなく歴史のパースペクティヴの中に過度に整理して配列したり「合理化」したりする事も、ある程度は避けられない。また、高齢者によく見られるが、信憑性を高めようという意識からか、年月日等ディテールに非常なこだわりを見せる事もある。但し、インタビューはインタビュイーの話の矛盾を指摘する事に目的がある訳ではないので、裏付けや訂正のないまま録音されていく事になる。更に、インタビュアーが白人であるか日系であるか、はたまた日本から来た研究者であるかにより、インタビューの内容にニュアンスの差が生じる可能性も高い。勿論、インタビュアーの側の視点や態度もインタビューの成否に影響を与える。完全にニュートラルなインタビュアーというものは存在しないが、時として自分の歴史理解やステレオタイプにとらわれて、インタビュイーを誘導したり、質問の内容を自主規制する事もあり得る。これは 1991 年に筆者が翻訳を刊行した

Roger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out*, 1986、邦題『リロケーション―日系米人強制収容の証言』西北出版、の「訳者あとがき」にも記した事だが、一世の中には、トラウマチックな体験を過小評価しようとする心理メカニズムを見せる者もいれば、社会学的なレファレンス・グループの求め方によっては『キャンプ生活はヴァケーションじゃった』と表現する者もかなりいたが、一般にそうした発言は日本人研究者のインタビュアーには好まれない。

日系米人強制収容について言えば、「公民権運動」という全米的な分水嶺を越える前と後では、ターミノロジーさえ異なってくる。その一つが「ジャップ」という呼び方である。ジェシー・ギャレットとロナルド・ラーソンは 1977 年、第二次大戦中にオーウェンス・ヴァレーの住民だった白人達（1 人、夫妻の内の妻の方が中国系）へのインタビューを 20 抜き出して *Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley* として刊行した。ところが、これは元々 *Jap Camp,*『ジャップの収容所』というタイトルであり、そのタイトルで広告もうたれていたものが、前年 1976 年に一部の日系市民活動家からの強硬な申し入れにより変更されたものである。その顛末自体極めて興味深く、我が国におけるパラレルな問題と重ね合わせる事も出来ようが、詳細の紹介は他の機会に譲る事とする。

合衆国の六〇年代は、公民権運動、ベトナム反戦運動、反公害運動の三つの運動で記憶されるであろうが、ジャップという言葉を用いるのは（ニップも同様）その時代背景の中では当然忌避されるようになっていた。それでも、例えばアグニュー・メリーランド州知事の 1968 年の副大統領選挙キャンペーンの途中での日系二世ジーン・オオイシに対する「ファット・ジャップ」発言のように、深刻な「失言」事件もおきている（詳しくは、当事者により、*In Search of Hiroshi,* 1988、翻訳は『引き裂かれたアイデンティティ』染矢清一郎訳、岩波書店、1989 年、の中に書かれている）。本稿で紹介するインタビューの中では、Jap という語は、アンナ・T・ケリーの話の中に引用として出てくるのみであるが、インタビュー集全体の中では少しの底意もなくジャップという表現が用いられている例が見受けられる。無論、底意のなさにこそ未だ意識が改められぬ証しがあったと見る事も出来ようが。

本文

アンナ・T・ケリー、ベシー・K・ペドノーとフランク・L・ペドノー夫妻の三人に対するインタビューを以下に紹介する。ちなみに、(15)、(16)、(17) は、「『ジャップの収容所』紹介」第一部からのインタビュイーの通し番号になっている。

(15) アンナ・T・ケリーとのインタビュー。Kがインタビュイーのアンナ・T・ケリー、B、Hがそれぞれインタビュアーのデイヴィッド・バータニョーリとアーサー・A・ハンセンをさす。

H : アンナさん。この近所、ローンパインとインディペンデンスに近い所に転住収容所ができるという事について、あなたが何らかの情報を得たのはいつでしたか？

K : そうですね、多分実際の建設が始まる 6 ヶ月前位だったと思います。

H : 何らかの形で建設作業に関わっていらしたのですか？

K : あたしは応急手当ての小屋を切り盛りしてました。収容所を建設した 5 つの建設会社全部の保険を担当していた太平洋損害保険会社（Pacific Indemnity Company）の応急手当の係だったのです。

H : 被収容者の内で誰か収容所建設に関わった人はいましたか？

K : いいえ、その時点ではいませんでした。彼らが行った建設といえば、公会堂などを自分たちで建てた時だけですが、それはもっと後になっての事です。収容所そのものの建設には彼らは参加していません。

H : 建設会社がどこから来たか御存知ですか？　ロサンゼルスを基盤にしていたものでしょうか？

K : 主力建設会社はグリフィス社だったと思います。

はっきりしないけど。ずいぶん昔の事ですから。それから配管、屋根葺き、電気工事など下請けがいたはずです。でも主力となる建設会社は、ロサンゼルスのグリフィス社だったと思います。

H：下請けというのは地元の人達でしたか？

K：いいえ、人間も会社も、どれも南カリフォルニアからやって来ました。

H：近隣の地域の人々は、どの位の規模で大工や鉛管工などとして雇われたんでしょうか？

K：ええ、あれは大変な突貫工事でとても急いで建設しなければならなかったものですから、誰でもその気があれば仕事に応募できました。でも労働者の大半は郡の外から来たと思います。

H：近隣の町であるローンパインやインディペンデンスの経済に何らかの影響があったと思いますか？

K：影響がない訳がありませんでした。補給の必要がありましたから。

H：どのような形で、反映されていたのが分かりましたか？　収容所のおかげで生活のレベルが上がったような人々が見受けられましたか？

K：いえ、それはありません。収容所建設用の資材はすべて持ち込まれたと思います。つまり当時は必要なだけの量を供給するだけの大きな店はこの地域にはなかったので、地元で調達されたはずはないだろうという事です。すべてが持ち込まれました。建設時の唯一の影響と言えば収容所で働いていた人が町で買い物をする事だけだったでしょうね。

H：警備員などとしての雇用はどうでしょうか？地元の人でそういう事に関わった人もいたのではないかと思うんですが？

K：それはその通りです。ですが警備の仕事はもっと後になって出てきたと思います。

H：お話しになっているのは初期の段階、建設の初期だけという事ですね？

K：ええ建設の初期の事です。

H：利益などがあったかどうか知ろうとしているのは、地域によっては転住収容所が自分たちの所へ設けられるよう張り合った所も実際にあったとしばしば言われているからです。と言うのも、御存知のようにああいう収容所は、総投資額として時には400万から500万ドルにのぼる高額の金を必要としましたので。しかし、そういう金の大部分はロサンゼルスの建設会社へ環流してしまって、地元には実際には全く入らなかったとおっしゃるのですね？

K：その通りです。この地域への経済的影響という事に関して言えば、恩恵の最大のものは収容所が建設されてから後の事だと思います。そうなってからは、地元住民もあそこで色々な役目で働きましたから。でも建設時には違いました。

H：この地域の人々が、マンザナーに収容所が設立される事になったと知った時の態度を思い出して頂けますか？

K：彼らは大反対でした。

H：反対を示す何か特別な例とか示威行為などを覚えていらっしゃいますか？

K：いいえ。つまり示威行為とかそんなものは何もなかったでしょうね。ただ意見だけだったでしょうね。

H：たとえば市場などではどんな種類の意見が流布していましたか？　店へ入ったり人と喋ったりしていて気付いた一般的な感情を何か覚えておいでですか？

K：そう、たとえば「ジャップの奴らめ（the damn Japs）。どうして俺達が奴らを抱えこまなきゃならんのだ」というような調子でした。この田舎では支配的だったのは恐怖だったと思います。何と言っても戦時中ですし、人々は恐慌をきたしていましたから。恐怖という点ではこの田舎も、南カリフォルニアも変わりなかったのでしょう、そうでなければああした事は決して起こらなかったはずです。何故って、あの人達、日系米人はアメリカの市民だったんですから。

H：ご自身で収容所に入って行かれたり、収容所で働かれたりしてどうでしたか？　収容所がつくられて 10,000 人もがそこに収監されるという噂を耳にするだけでなく、発足当初の日系人の到着を目の当たりにする機会を得られた訳でしょう？

K：最初の日系人が到着した時には、あたしはそこ

にいました。意見ねえ…意見について話していたんですわね。きっぱり言っときますけど、収容所建設に携わっていた人間達はただもう同情してました。とりわけあんなひどい状況下に収容所に押しこまれていった人達には、これ以上ないくらい同情してました。だって、最初の集団が収監された時には、受け入れ準備もまるで出来ていなかったんですよ。

H：バラックもまだ建っていなかったんですか？

K：それはないわね、バラックがいくつか建ってはいました。だけど、扉も窓もついてなかった。建設会社の人達が夜遅くまで働いて、何とかいくつかのバラックを戸締まりできるものにして、いくらかの日本人を雨露をしのげるように中に入れたんです。女、子供、お年寄り、みんないたわね。人間社会の断面だったわ。

H：春の事でしたか？

K：ええ、早春ね。

H：3月頃でしたか？

K：ええ、早春だったわ。とっても寒くて風も強くてね。とってもいやな天気だったわ。

H：あなたのようにあそこで働いていた白人に対して、日系米人の反応は如何でしたか？　あなたに敵意を示すような事は？

K：とんでもない。敵意なんてこれっぽっちも感じなかったわ。あたしはあの人達とあまり接触がなかったわ。と言うのも、応急手当の小屋は正門の外側にあって、そこには、製材用の台があったり、材木が積み上げられていたりでごちゃごちゃだった…それに、小屋は東側にあったんだけど、建物はみんなずっと離れた西側にありましたからね。日系人にはそうたくさん会う機会がなかったわね。ほとんどなかったわ。

H：マンザナーにはどの位おられましたか？

K：2ヶ月半でした。

H：その後は何をなさっていたんですか？

K：もうあそこでは働かなかったわね。働こうと思えば働けたけど、断ったんですよ。

H：最初の年の終わり、1942年の12月、パールハーバーの日の前日に当ったんじゃないかと思いますが、マンザナーである程度の規模の暴動が起きて、日系人が2人死に、10人が負傷するという事件があったのを覚えておられるのではと思うんですが。インディペンデンスの町でその事件に対して何らかの種類の反応があった事を覚えておられますか？ 住民は暴動に気付いていましたか？

K：勿論気付いていました。だって、騒ぎを起こした人間達を排除して事態が掌握されるまで、保安上の見地から日系人の一部が収容所から出されてデスヴァレーの方に連れて行かれましたからね。でも、マンザナーで起きたのはそれ一回きりだったわ。

H：暴動で町の住民の側に不安が広がりませんでしたか？　郡のどこでも新聞はこぞって取り上げたのでしょう？

K：そうね、取り上げない訳はなかったわね。そんな事に煩わされないというのが少数で、ほとんどの住民はまた怖くなったでしょうね。

H：あなたは仕事をお辞めになった後、もう収容所には行かれなかった？

K：そうね。でも、そう言ったら不正確かしら。事態がすっかり落ち着いてから、日系人とまだそこにいた建設関係者との間で日曜日ごとに野球の試合があったの。二回は出かけたわね。

H：いく人かの人に聞いたのですが、収容所で雇われた白人の教師達がインディペンデンスやローンパインにやって来ると、反感がひどく、「日本人贔屓（Jap lovers）」と呼ばれたりしたし、食事を出してくれないレストランもあったそうですね。実際そうだったのですか？

K：ある程度は事実でしたけど、そんなには。そうねえ、ここは小さな町だし、住民も変わらないわ…つまり、頑迷だし、事実を深く掘り下げようとかそういう事はしません。無知が非難を助長するのね。

H：何か非難の特別な例を覚えておいでですか？ 自警団活動はありましたか？

K：とんでもない、知りませんわ。自警団活動なんてまるで思い出せません。どうしても忘れられない事が一つありますけど、とりわけて悲しい思いをしましたよ。陸軍にいたんで合衆国の制

服を着た日系人の若者が一人、休暇で帰省したのね。家族がみんなマンザナーに入っていたのよ。勿論、その兵隊も海外に送られる事になっていた。マンザナーに家族に会いに来たのね。住民は、とりわけローンパインの住民は愚かだったから、家族は収容所にいるんだからというので、その若い兵士が休暇の間ずっと、収容所から出て町にやって来るのを許さなかったのよ。でも、その若者はアメリカの兵士だったのよ。こうした感情があったという事をあなた方に伝えたいのよ。簡単に説明は出来ないけど。

H：なるほど、緊張感があったんですね。

K：そうなのよ。

H：それに、先程話に出てきた恐怖心もあったと。

K：収容されてる人達が大変な給料を払って貰っているとか、王侯のような生活をしているといった類の噂話もたくさんあったわ。事実じゃなかったのに。

H：住民の感情を推し測るのにこうした噂は大事だと思いますので、噂話についてもう少し思い出して頂けますか？　その人達は、日系人達は配給された食料…砂糖や肉などを食べていたんだと感じていたんですか？

K：ええ、一人あたしの知っている人がいて、収容所のあら探しをして、収容者の暮らし向き、持ち物、食べている物なんかについて、散々好い加減な事を言ってましたよ。自分が買い溜めするような人間だったのにね。

H：買い溜めをしてたんですか？

K：そうです。

H：それじゃ、いくらか偽善的だったと。

K：全くの偽善者でしたよ。つまり、その人間の場合が典型という訳で、そんな連中はたくさんいたわね。

H：そうした噂は町の住民のほとんどに広く信じられていたとお考えでしょうか？

K：残念な事にその種の噂が信じられていたのは本当だと思います。始まったばかりの頃は、あたし達は事態をきちんとしたものにしようとしてみんな忙しかったけど、仕事の勢いが治まってくると、自分自身で多少情報を掘り下げる機会が持てました。そうした人達がしゃべくっていた情報も、口にしていた事も、どれもこれも嘘っぱちでした。収容所には、ロサンゼルス総合病院で内科・外科両方を担当していたモト博士のような知的専門職の人達がいました。マンザナーの病院で働いていましたけど、シェービングクリームや化粧用石鹸といったものをやっと買える程度の月 18 ドルを貰っていただけでしょう。

H：お話しになっているのは、おそらくゴトー博士の事じゃありませんか？

K：いいえ、モト博士でしたよ。モトに間違いありません。［ミスター・モトからの類推の可能性があるのではと推測される…池田註］

H：と言うのも、ジェームズ・ゴトー博士という人がいたからなんですが。ひょっとして彼の事ではないかと思ったものですから。

K：そうね、間違ったかも知れないわ。おっしゃる通りかも。いずれにせよ、その当時ロサンゼルス郡総合病院で働いていたとても有名な内科医でした。病院の名前はもう変わっているかもね。だけど、ほかの知的専門職の人も…看護婦、法曹界の人間、教員…みんな月に最高で 12 ドルだったんじゃないかしら。それでもとても喜んでましたよ。持っていた物はみんな没収されてしまっていたんでね。

H：たくさんの住民がそうした状況に個人的な接触を持たなかったのに比べ、収容所と直接接触があったという点で、あなたの立場は少し異なっていたんではと思いますが？

K：ええ、そうね。だけど、外部の人間達に話そうとしても、あたしの言う事を信じはしなかったでしょう。話すのがあなただったとしても信じなかったでしょうよ。例えば、今話したようなとんでもない事態が起きたのよ…戦時中だし、非常時だったのよ。あなたがどっちだと判断してもいいけど、善かれ悪しかれ、時の権力者達が「我々は収容所を建設し日系人をそこに押し込めなければならない」と言うのだから、やっぱりやらなきゃいけない事だったのよ。いい事、ベーカーズフィールドから派遣されてきた組

合の代表がいたわ。人類の誉れとなる事をするタイプじゃなかったわね。いずれにせよこの人物と来たら…つまり、あたしの応急手当の小屋がここにあるとしたら、ちょっと前に話した中核となる建設業者グリフィス社の中央事務所がそこにあったわ。そのバラックみたいな建物の端に給与支払い窓口があって、週ごとに給与が支払われていた。この人物ときたら、いつでもその窓口のすぐ脇に立っていたのよ。収容所の人達は僅かばかりのお金のために惨めなほど働いていた。建設に携わっていた人達はほとんどが、とても気の毒に思っていたのよ。その日系人達に同情してたわ。ところがこの人物ときたら給与支払い窓口の脇に立って、日系人の労働者達が給与小切手を貰いに来る時、組合のバッジを着けていないと、「いいかい君、僕が君の小切手を現金化してあげよう。もし僕が君の小切手を現金化して君の組合費を取ってやらなかったら、君は明日は働けないんだぜ。」

H：えらく抜け目のない男ですね。

K：ひどいものよ。誰もがそいつの事を嫌っていたし、頭の上に何か降ってくればいいのにと願っていた。でも、あたしの思うところでは、最悪だったのは、組合のオルグが収容所に入ってきた事ね。グリフィス社でのトップが何て名前だったか思い出せないわ。随分経ってしまったし、考える事もなかったから。いずれにせよ、その男はある日救急手当の小屋にやって来てこう言ったわ。「アンナ、おたくにゃ私が今何を見つけてきたか分かるまいね。」それであたしは尋ねたのよ、「何を見つけたの？」「おたくもカムフラージュ用のネットの事を知ってるだろう。」日系人はカムフラージュ用のネットを作っていたのよ。それ程お金にはならなかったけど、やる事があって喜んでいたわ。政府のためにカムフラージュ用のネットを作っていたのよ。何とかして、組合オルグが2人、収容所に入ったのね。みんなは、どうやって入れたか分からなかったけど。だって、衛兵が固めている正門があったのよ。出入りには、パスだ何だと必要だったのよ。ともかく、2人組合オルグが入って行って、ネットを作っている所に行きあわせた。そこで一歩踏み込んで、その仕事をしている人達をオルグしようとしたのね。（笑い）馬鹿馬鹿しいったら！　そんな話にも出くわしたのよ。

H：収容所にどうやって入れたのか不思議ですね。

K：結局分からなかったわ。フェンスをすり抜けたんでしょうよ。

H：その2人は、カムフラージュ用のネットの製作所にいる日系人をオルグしようとし始めたんですね？

K：そう。そこの日系人達はほとんど無給に近い形で働いていたのよ。収容所は、ほぼ完璧に自給自足出来てたのよ。何故って、ベアズ・クリークやシェパーズ・クリークから水が引けたし、収容所に供給するための水を貯えるのに必要とした大きな貯水池も出来ていた。10,000人分のために造られたんだけど、8,000人位しかいなかったんじゃないかしら。大きな貯水池を造って、引き入れた水の一部を収容所で使っていたわね。それから、一部はクリークから灌漑用に放水していた。収容者達は立派な菜園を持っていたわね。

H：もうですか？　初めの2、3ヶ月の内にですか？

K：そうね、始められるようになったら直ぐにね。家禽や豚なんかもいたし。実際、マンザナーで生産された食糧がかなり他の収容所に送られたのよ。

H：町にも出荷されましたか？

K：いいえ。勿論、町の住民は盗んではいたけどね。（笑い）

H：盗んだんですか？

K：政府のプロジェクトのどれとも似たようなものよ。そこで働いている者達が…

H：えっ、プロジェクトで働いている人間が？

K：そう、そこで働いている白人達がぶつを持って帰るのよ。

H：アンナ、収容所を辞めた後、何をされていましたか？　インディペンデンスの町で働いていたのですか？

K：そうね、この角に43年間いるのよ。主人とあ

たしで1931年に始めたのよ。

H：ここでガソリンスタンドを開いたんですね？

K：ええ。主人が結婚する1年前にここにやって来たの。ガソリンスタンドはそれより10年前からあったわ。お話ししたように、あたしはマンザナーの仕事に引っ張られたの。分かるでしょ。みんながマンザナーの仕事に就いたのよ。手助けもなかったし、労働力を必要としてた。それで、あたしも仕事に就いたの。そこを辞めて直ぐに他の仕事に引っ張られて、インヨー郡の生活保護の責任者になったの。主人が養ってくれると判断するまでその職に就いたのよ。男達が戦争から帰って来たら、辞任を認めて貰えると思ったしね。

H：それじゃあ、あなたはマンザナーを辞めた後、インヨー郡の職員として働いていたんですね。

K：マンザナーの後でね。

H：ローンパインやインディペンデンスの住民で日系人に好意的に反応するかも知れない者に、一般からの圧力がかかったという記憶がありますか？　転住収容所に日系人を収容する事で、あなたは日系人の代弁をしたり、政府に批判的になったりはしないはずだという暗黙の了解のようなものはありましたか？　そういった暗黙の共同謀議のようなものを御記憶ですか？

K：あたし自身は目の当たりにしたことはないわ。だけど、ちょっと前に話したとおりあたしは毒舌家だからね。あたしが恐れず立ち向かうというので、みんなもあたしのあら探しをするのには及び腰だったわよ。その上、あたしは情報通だったから、みんなにも、あたしが収容所やマンザナーの住人について本当の事を知っているのが分かっていたのよ。

H：あなたは、第二次大戦中もガソリンスタンドとは多少なりとも関わっておられたんですか？

K：勿論よ。

H：旅行者もここを通って行ったでしょう。そんな旅行者にとって、収容所のどんな部分が好奇心をかき立てたんでしょうね？

K：ほら、人間て自動車に乗っている時には、催眠術にかかっているようじゃない。収容所の側を通り抜けていったたくさんの人達も、収容所がそこにある事に気付きさえしなかったようよ。勿論、マンザナーには仰々しい所はなかったし、大きな看板なんかもなかったわ。

H：監視塔はいくつかありましたよ。

K：ええ、監視塔はあったわ。だけど、すごいスピードで掠めていくと、それにも気付かないものだったわね。

H：インディペンデンスやローンパインで、恐怖心というのは大きかったでしたか…たぶんあなたはローンパインについて述べる事は出来ないでしょうけど、周辺地域はどうでしたか…収容所が解体された後、日系人がこの辺りに留まるんじゃないかという恐れはありませんでしたか？

K：恐らくね、でもあたしはそれほど知らないのよ。お話ししているように、あたしには他に仕事もあったし、それにかかりきりだったの。週に七日間も働いたのよ。一緒に働いていた人や知人だけじゃなくて、あたしたちみんなが戦時下の状況で何とか事態に対処していこうとして目が回るようだったわ。ほら、ガソリンや何かも配給制だったし、だから…例えばあたしがデスヴァレーに出かけなきゃならないとなると、行き着くだけでも大変だったのよ。ねっ、そんな種類のことよ。

H：地元の住民が招待されたような何らかの種類の催し物が収容所で開かれたのを覚えておられますか？

K：勿論！　いっぱいありましたよ。そしてたくさんの住民が出かけたわ。後になって、事態が落ち着いてからだけどね。

H：時々は、お返しに日本人が町に出て来るのを認めたことは？

K：思い出せないわねえ。日本人は、収容所の中にいなければならなかったんだと思うわ。日本人が町に出て来るのを認めたことは思い出せないわ。だけど、日本人の中でも、パスを持っている者がいたかも知れないわ。分からないわね。確かなことは言えないわ。

H：この辺りの住民の多くが、収容所の設置の前に、

日系米人、あるいは中国人とかフィリピン人といったアジア人を見かけたことがあると思われますか？

K：そうね、一帯には、中国人が三、四人かな。日本人も同じね。インディペンデンスホテルに長い間、中国人コックが働いていたわ。鉄道駅には、日本人の職長も一人いたしね。ほら、この辺り一帯に狭軌の鉄道が走っていたのよ。それで、日本人の職長が一人とその下にいた中国人労働者が一人いたってわけね。だから、地元住民が、アジア人をまるで知らなかったという訳ではなかった。だけど、たくさんはいなかったのよ。黒人と同じよ。一人か二人はいたでしょう。勿論、これは30年前の事よ。

H：戦争前には、この一帯で強い反日本人感情があったとご記憶ですか？

K：とんでもない。戦争前には、かけらもなかったと思いますわ。明確な反アジア感情とかそういったものは何も思い出せないわ。

H：この一帯が実際にかなりの程度観光業で保っていたという意味で、矛盾のようなものを感じますが。

K：仰る通りね。

H：それで、戦時中は、観光業はかなり衰退したと。

K：そうなったわね。

H：皮肉ななりゆきじゃありませんか？

K：本当にね。

H：さて収容所での体験から話を進めましょう。覚えておいででしょうか？　昨年、1973年の春に、収容所の外に記念碑が建てられ、記念の銘版が置かれた。アメリカ社会のいくつかの要因から収容所が存在してしまった事を示すものでした。「人種差別、ヒステリア、経済的搾取」について述べられています。銘版の設置に対するこの辺りの反応を何かご記憶ですか？

K：反対意見という事？

H：ええ、反対意見という事ですが。

K：それに対する反対意見は知らないわね。あったのかも知れない。だけど、銘版の献納式があったというので、反対意見が吹き出たなんて知らないわね。ほら、バスに乗った人達がやって来た。日本人、白人、みんなよ。この郡一帯からもね。

H：地元紙でその事を取り上げた記事を見ましたか？

K：覚えていないわね。何にせよ、反対意見が地元紙に載るとは思えないわね。

H：『チャルファンプレス』紙をお取りですよね？

K：そうよ。ローンパイン、インディペンデンス、ビショップ、ブリッジポートの町々の新聞はみな『チャルファンプレス』紙が印刷しているのよ。

H：それぞれ版は違うんですね。だけど、基本的には、町毎に一ページ目を変えるだけですね。

K：ええ、フロントページをね。（笑い）

H：『チャルファンプレス』紙が、1940年代に収容所の存在に対してとっていた態度をご記憶ですか？

K：思い出せないわ。分からないし、当時『チャルファンプレス』紙に立場なんてものがあったのかしらねえ。この新聞は、どんな立場も取らないんで知られていたのよ。言わんとするところを分かって下さるわね。

H：かなり煮え切らない編集方針だった？

K：ずっとそうだったわ、ええ。実際、最近になって、過去のいつにもまして明確な立場を取るようになっているのよ。議論を呼ぶようなものは何も取り上げなかったのよ。

H：私は、話題にすべき事を全部は取り上げていないのではと思うので、貴方に体験したすべてを、収容所で働いた経験、収容所への地域社会の対応などについてすべてを振り返って頂きたいんですが。そして、思い出すのに必要とお考えになることを、この機会に何も彼も議論して頂きたいのですが。

K：確信しているんだけど、暢気なメキシコ人なら兎も角、ほかの民族ならば、一個中隊くらいの兵士達によって鉄条網の中に大人しく収容されたりしないでしょうね。あたしに言わせれば、収容されていた日本人のタイプをよく物語っているわ。最初に収容所に到着し始めた頃は、日本人達の顔を見れば、そりゃ怯えていたわ。恐れ、疑いを持っていた。ほとんど諦め切って

いた者も多かったわ。前途に何があるのかってね。持っている物は、何も彼も没収された。生活する場さえあるかどうか分からない。だけど、日本人達は、そういった事をみんな乗り越えたのよ。建設会社が喜んで呉れてやるような材木や金属のかけっぱし、このあたりに生えていた植物、それから器用さだけで、バラックの中で使う家具を作ってしまった。小川が流れている小さな公園を造って、日本風の橋を架けたしね。このあたりに生えている植物はそのまま生やしていた。だって、ほら、初めはほかに利用できるものがなかったから。行ける時には、外の砂漠に出かけて行って、山ん中に入って、サボテンや野生の花を持ち帰って、バラックの戸口に植えて綺麗に見せたりね。今でも1脚椅子を持っているわ。前は、4脚あったんだけど。収容所が閉鎖され、日本人達が皆いなくなってしまうと、そこにあったものを売りに出したのね。日本人が木材の切れっ端から作った椅子を4脚、1脚1ドルで買ったのよ。実際、長い間このテーブルの周りに置いて、4脚とも使っていたのよ。

H：こんな物を政府が競売に付したんですか？

K：そうね、特に競売ではなかったかも知れない。そこに売りに出されていたのよ。競売だったのかもね、何たって政府の所有物だったんだから。あそこで本当に競売があったのかどうか思い出せないわ。

H：政府が売りに出した？

K：そうよ。

H：ローンパインで元はマンザナーのバラックだった建物をいくつか見てますよ。ああしたものも、この辺り一帯に点在しているんでしょうか？インディペンデンスにも、いくつかありますか？

K：インディペンデンスにあるかどうか分からないわね。だけど、気が付かないのかも知れないし。

H：壁や何かはかなり手を加えてありましたが。

K：そうね、すっかり変えられてるのね。今ではアパートになっているのが一軒あるかも知れない。あの建物がそうかもねえ。はっきりしないけど。

H：日本人が出て行った後、マンザナーで、あなたが仰っていたような家具や何かを同じ様に買っている町の住民をたくさん見かけましたか？

K：ええ、見かけたわ。あたしは、保存してくれるんじゃないかと思って、ここインディペンデンスにある東部カリフォルニア博物館に3脚は寄贈したのよ。

H：博物館であなたの寄贈した内の1脚を見たと思いますよ。簡単な注釈がついていて、マンザナー戦時転住収容所の被収容者が作ったと書いてありました。

K：嬉しいわね。収容されてた日本人達がどうやって色んな事に我慢できていたのか分からないわ。だって、ほら、バラックで使われた木材は生乾きだった上に、ここは乾き切った土地でしょ。乾いているから、どうなってしまうかお分かりよね。直ぐに乾燥しきって、大きなひびが入るのよ。タールペーパーで覆っていたのよ。そう建築用のペーパーよ。屋根葺き用のペーパーでさえなく、重い黒いタールペーパーだった。収容所では、いつでもそのペーパーを使っていたわ。板がひび割れると、ペーパーにもひびが入ってしまうから、雨風が入ってしまうのよ。それでも、そこで暮らしていたんだから。

H：多分三分の二かそれ以上もがアメリカの市民権を持つ人達をマンザナーに押し込めるという事が、合衆国の民主主義的な体制へのあなたの信頼を損なったりはしませんでしたか？

K：民主主義的な政治への信頼を損なったとは思わないわ。だけど、アメリカの歴史の中で最大の汚点の一つだと考えてます。だけど、民衆ってのはあんな風だから、パニックになるボタンを押したら、どんな事態も生じ得るのよ。また、起きる可能性があるわ。

H：息子達に戦死された町の住民はどうでしたか？

K：ひどく憎んでいた者もいたし、そうでない者もいたわ。ほら、許したり、理解したり…

H：現在このインディペンデンスに日系米人が住むとしたら、幸せに暮らせるでしょうか、それとも彼らに対する反感がまだ残っていますか？

K：勿論、もし住みたいのならここで暮らせますよ。ほら、たくさんの人達が亡くなったから――当時あそこで働いていた人達や、とても頑迷だった人達は、年配者だったからもうこの世にいないからね。若い部類の人達はたくさん引っ越して行って、もうここにはいないし。この町の住民は、顔ぶれがとても変わってしまったのよ。

H：戦争前より人口は増えましたか？

K：いいえ、人口はほとんどと言って言い程変わらないわね。

H：1,000 人くらい？

K：たぶん、今現在では、誰も彼もひっくるめれば、1,200 人から 1,500 人はいるんじゃないかしら。だけど、今増えているのは、南カリフォルニアの引退した人間達が流れ込んでいるのね。町の様子が変わったわね。

H：インディペンデンスは、ローンパインとは違った種類の町に見えますね。ロサンゼルスから来る引退した人間は歓迎されていますか？

K：そうね、歓迎してるかしてないかどう言ったらいいのかしらね。疎まれているのは、引退した人達が、手に入れられる土地か家、あるいはその両方を買ってしまうので、ここで生計を立てている者達には余り残らないって点だと思うわ。そんな気分はあるでしょうね。でも、同時に、ここでお金を費って呉れるという単純な理由からこの小さな町の経済を活気づけてもいる。だから、釣り合いが取れているのよ。

H：そうすると、前に気づいたのと同じような皮肉な事態ですね。

K：ええ、前に話し合ったのと同じね。ただ…

H：再度、戦前の状況に話を戻しましょう。インディペンデンスについて少し話をしましたよね。インディペンデンスの町を動かしていた重要人物達の小さなサークルがありましたか？

K：ええ、ありましたよ。いつでも、いくらかの重要人物達がいますよ。

H：最初の入植者達の家族といった類のですか、それとも実業家達ですか？

K：そうねえ。インディペンデンスに関する限り、全階層を含んだものと言えるかも。ここには、ロサンゼルス市水利エネルギー局の本部があります。本部がある上に、郡庁所在地でもあるわね。ずっと昔のようには、牧場や何かは周りにないし、牧場に携わっていた人達は、引っ越したか、町に移って商売替えをしたんでしょうね。だけど、町を実際に動かしているのは、シヴィック・クラブと呼ばれているわ。昔、コマーシャル・クラブとして始まったんだけど、その内に名前を変えたのよ。このシヴィック・クラブには、誰でも入れるわ。コマーシャル・クラブは、実業家のクラブね。昔は、町の事にとてもよく目を配っていたのよ。あたしがまだ子供の頃よ。ずっと昔の話ね。それから、実業家や知的専門職の組織だったコマーシャル・クラブは、ちょっと格が落ちたのね。というのも、知的専門職でも、実業家でもない人達を受け入れたからね。

H：クラブにですか？

K：クラブにですよ。それで、ほら、イメージが変わってしまったのね。今でも時折り実業家がシヴィック・クラブの会長をやってるはずよ。

H：振り返ってみて、インディアンへの態度はいかがでしたか？　インディアン達は、町に適応していましたか？

K：この地域で、インディアンがこれまでも疎外されてきたとは言えないと思う。あたしの考えよ。あたしはインディアンの子供達と学校に通ったのよ。あたしと同年輩のインディアン達は、水利エネルギー局で働いたり、郡や州に勤めたりしてたわ。あたし達みんなと同じよ。良い教育を受けていた者もたくさんいたしね。

H：彼らの社会的地位は、この町では白人と比較して高かったと言われますか？

K：今の話？

H：当時です。

K：当時ね？　当時はそれほど高くなかったかもね。でも、今をさすなら明らかに変わってるわ。つまりね、ずっと昔、初めの頃はね、あたしのバスケットを編んでいたような年配のインディアン達は、自分達の生活様式が好きで棄てられなかったってことは勿論覚えておいて欲しい

んだけど。あたしの知っているそんな人達の中には、デスヴァレーでウィッキアップって呼ばれる小屋［wikiup、先住民の苫小屋を指す…池田注］に住んでる者もいた。残りは、デスヴァレーのモニュメントが建てられた後、政府が建てたリハブハウス［rehab house は、rehabilitation house の事。「社会復帰用家屋」ほどの意…池田注］に住んでいたわ。この辺りではどの町にも、町の外にインディアンが保留地に住むために土地が設けられているわ――本物の保留地じゃないけどね。違うのよ。小さな木造家屋に住んでいて、とてもよく手入れされてるものもあったし、そうでないのもあった。あたし達と同じよ、ねっ、同じ事よ。昔は砦に小学校があったけど、あたしの生まれる前のことね。砦に小学校が一つとここに一つね。後になると、インディアン達も小学校に通うようになった。小学校は統合されたんで、みんなここの小学校に通うようになった。インディアンもね。あたし達のハイスクールに通ってきたのと同じよ。あたしが学校に通っている頃には、学校でも最高の運動選手の中にインディアンの選手がいくらか入っていたわね。陸上のチームとバスケットのチームがあった――あの頃にはフットボールのチームはなかったわね――あと野球チームとかそんなようなものがね。インディアン達は、出来も良かったのよ。

H：収容所のあった時代に、インディペンデンスハイスクールとマンザナーの若者達との間でスポーツ競技会のようなものがありましたか？

K：マンザナーって事？

H：そうです。

K：マンザナーには、野球チームがあったわね。

H：だけど、そのチームは、インディペンデンスのチームと試合をしたのでしょうか？　ハイスクールのチームは試合をやったのでしょうか？

K：さあ、知らないわね。マンザナーの学校と町の学校が試合をした記憶はないわね。なかったんじゃないかな。

H：もう一つ質問させて下さい、アンナさん。大変な恐怖心があったのでしょうか？　つまり、このインディペンデンスにはおよそ 1,000 人の人口があり、ローンパインの町もここと比べてそれほど大きくない…

K：同じ位よ。

H：戦時下に、その二つの町のちょうど真ん中に 10,000 人もの人口のある町が出来た。何か起こるんじゃないかという隠れた恐怖心があったのでは？　インディペンデンスの住民にとっては、緊迫した時期だったのではありませんか？

K：人によっちゃ、緊迫してると感じたでしょうね。恐れてる者も、そうでない者もいた。恐怖がどのくらい広がっていたのかあたしには分からない。だって、あたしは当時とても忙しかったし、たくさんの人間と話し合う機会なんてなかったもの。

H：なるほど、アンナさん。ディヴィッド・バータニョーリ、何かお尋ねしたい事はないかね？

B：マンザナーの銘版について、ちょっと話し合いたいのですが。あの銘版についての町の住民の一般的な反応について話して頂きましたが、あなた自身のご意見は何も口にされていないので。

K：あそこに銘版を置いたのは、とても良かったと思うわ。ほかの銘版でよく起きるように、誰かが盗んでいかなきゃいいなとだけ願ってるわ。収容所は、史跡として登録されるべきよ。

B：銘版の文言については賛成ですか？

K：どんな表現だか知らないのよ。設置式にも出なかったし、知らないのよ。立ち寄って読んでみる機会も今までなかったしね。あたしがそんな事を言うなんて馬鹿げてるけど、本当なのよ。

B：ご覧になりたければ、ここに写しがあります。

H：アンナさん、テープに残すので、私が大声で読み上げます。それから、それを広げますから、コメントを付けて下さい。

K：いいわよ。

H：「第二次大戦の初期に、日系の祖先を持つ十一万の人々が、1942 年 2 月 19 日発令の行政命令九〇六六によって転住収容所に収監された。

十ヶ所に及ぶそうした強制収容所の最初のものであったマンザナーは、有刺鉄線と監視塔によって囲われ、過半数がアメリカの市民からなる一万の人々を収監していた。ヒステリア、人種差別及び経済的搾取の結果として当地において被られた不正と屈辱が二度と再び現れる事のなき事を。」

K：「強制収容所」（concentration camp）と書くべきではないわね。そうじゃなかったんだもの。

B：どういう事でしょうか？

K：うーん、あれは…強制収容所なら、恐ろしい苦境に陥るわけよ。つまりね、ヨーロッパの強制収容所なら、ただもうすさまじくて、みんなぎゅうぎゅう詰めで、基本的人権なんてない。身体を清潔にしておくとかそんな手段もね。それは、マンザナーにはあてはまりません。マンザナーは、戦時転住収容所（war relocation center）でした。生活条件は、初めはとても悪条件だったけど、収容所の建設が済んで、あたしの話しているように日本人が自分達で気持ちよく住めるように工夫する機会を得ると、とても良くなったわ。ちっとも悪くはなかったのよ。

B：彼らには限定されていたけど自由が与えられていたと感じますか？

K：そうね、あの人達は自由に収容所を出たり入ったりは出来なかった。魚釣りに行く以外はね。山に入って魚を釣るのは、許されていたわ。

B：その事について、さらに詳しく述べて頂けませんか？

K：そうね、他に何を話せばいいのかしら。ほら、小川には鱒がいたのよ。収容所の裏手、高地にある湖にも鱒がいたし。

B：彼らはしょっちゅうそこに行っていた？

K：そうね、多分出られる時はいつもね。

B：他の人達から耳にしたのですが、日系米人のたくさんの者が、アメリカ市民から護られているというので、収容所に入っているのを喜んでいたそうですね。

K：その通りね。

B：日系米人からそんな感じを受けましたか？

K：そうねえ、あの人達から直接じゃあないけど、収容所が建設されてからその中で地位についたあたしの友人達からだけはね。

B：ご友人達がそれについてあなたに話した事の具体例、あるいはご友人達が日系米人達と交わした会話を何かご記憶でしょうか？

K：そうね、特にこれといって会話を覚えている訳じゃないけど、ただ、たくさんの日本人達、とりわけ年配の人達は、収容所が建設された後では、これから何が起こるか分からないという恐れに打ち克つ事が出来て、収容所の中にいるのを喜んでいたのは分かっているけど。何も彼もから引き離されて、これから何が起こるか分からないなんて空恐ろしい事だわよね。それから、考えていたよりはましという事になって…勿論、自分の家に住むような訳にはいかなかったけど、あの人達はとても快適な暮らしになるよう工夫したし、食べ物も良かったし、面倒もみて貰っていたわ。勿論、日本人の知的専門職の人達がみんな収容されたんだし。学校もあったし、教員の質も高かったわ。家具とか着る物とか自分達で作っていたのよ。

B：あなたは、ことの次第によっては、同じような状況が合衆国で再び生じ得るとのお考えを示唆されましたね。

K：起こるかもね。時には、人々は、経験や歴史から学ばないものなのよ。みんなはあんな風だから、パニックのボタンを押してしまうのね。

B：公民権運動や何かの観点から考えて、白人達はまたあんな事を支持するとお考えですか？

K：そうならない事を祈るけど、保証はしかねるわ。（笑い）多分、厳しい言い方かも知れないけど、でも…分からないわね。

B：アーサー［・ハンセン］がないようでしたら、私にはこれ以上お尋ねする事はありません。

H：では、アンナさん、カリフォルニア州立大学フラートン校日系米人オーラルヒストリープロジェクトに代わりまして、ご協力に大変感謝致します。私もディヴィッドも御礼申し上げます。ご協力と率直なお答え、有り難うございました。

K：とんでもありません。たくさんの日系人が、両

親や祖父母が戦時中いたところを見にやって来て、このガソリンスタンドに立ち寄るわ。ここは近いから、行き方を教えてあげられる。姪が一人、南カリフォルニアで日系人と一緒に働いている。その日系人は、若い人でね。両親がマンザナーにいたのね。その日系人が何年か前にここの来たのよ。インディペンデンスの女性のヘレン・ガンが、収容所で働いていて、出来るだけの事はしたのね。ヘレンは、感謝祭には七面鳥を焼いて、砂漠に持って行って砂漠のネズミ達に食べさせるような感じの人だったわ。でね、ヘレンは日本人に出来る限りの事をしてやったので、日本人は彼女に敬意を抱いていたわ。実際、日本人達に愛されていたわ。それで兎に角、彼女はここで結婚したんだけど、夫婦でサンフランシスコに移ったのね。どういう訳か、その日系人がそれをかぎつけてね。ヘレンと旦那さんは、メキシコ旅行に出かけるところだった。それで、その若い日系人がマンザナーにいたことのある日系人達に出来る限り連絡をとってね。ヘレンと旦那さんがロサンゼルスに着くと、みんなで二人のために素晴らしいパーティーを開いたのよ。結婚祝いにといって綺麗なお皿のセットも贈ってね。とっても素敵なことに思えるわ。ヘレンは、ほら時々いるでしょう、済まないと思ったし悲しかったので、日本人達を助けるのに出来るだけの事をするってタイプだったのよ。

H：ヘレンはご存命ですか？

K：いいえ、亡くなったわ。

H：それでは、アンナさん、今一度御礼を申し上げます。

（16）ベシー・K・ペドノー

ベシー・K・ペドノーとのインタビュー。Pがインタビュイーのベシー・K・ペドノー、Bがインタビュアーのデイヴィッド・バータニョーリをさす。

B：ペドノーさん。あなたは第二次大戦中にオーウェンス・ヴァレーに住んでいた多分たった一人の東洋人だったんでしょうね？

P：そうね。当時は母も生きていました。南インヨー郡で東洋系はあたし達だけでした。インヨー郡の北の方では、他にもいたかも知れないけど。

B：お父様はご存命でしたか？

P：いいえ。

B：あなたはどのようにしてオーウェンス・ヴァレーにやって来たんですか？

P：そうね。とても面白いのよ。ついこないだ、ローンパインの内科医で日系人のコバヤシ博士と話をしたら、博士がそれを尋ねてきたのよ。あたしの母は寡婦（やもめ）でした。子供は二人、姉妹ね。母はアドベンチスト教会の手伝いをしにローンパインにやってきたのね。ローンパインキャニオンに寡婦や孤児の家があったし、年寄りを入れておくサナトリウムもあったわ。変人の年寄りをね。母がたまたまここに来たのはそんな訳よ。母は看護婦だったから、母をここによんだのね。

B：なるほど。それじゃ、その時にご家族はオーウェンス・ヴァレーに移り住んだ。あなたはその頃仕事は持っておられましたか？　第二次大戦中は働いておられたんですか？　差し支えなければ、おいくつでしたか？

P：第二次大戦中は23歳でした。でも、初めてここに来たのは、8歳の時よ。

B：戦時中は働いておられましたか？　まだ、結婚してはおられなかった？

P：いえ、結婚してたわ。あたしは、夫と同じ職場の滑石会社で働いていたのよ。その頃は、給与支払い係ね。

B：ご自身が東洋系で、あなたは日本人の習慣や日本人の生活様式をほかの住民よりずっと良くご存じだった、そうだった筈に違いないと考えるんですが。

P：そんなことはないわ。あたしは日本人じゃないもの。

B：そうですけど、あなたは中国人ですよ。

P：うーん、あたし達は、ほら、孤立していたから、中国的な生活様式もやっぱり知らないのよ。

B：お母様は合衆国生まれでしたか？

P：ハワイで生まれたのよ。

B：ああ、それじゃあなたは中国人じゃなくハワイの方ですか？

P：いいえ、あたし達は中国人よ。ハワイ生まれだけどね。

B：お母様のご両親は中国出身でしたか？

P：と思うけど、母は孤児だったから。

B：なるほど、じゃあなたは三世という訳ですね。

P：そういう事になるわね。

B：他の人達と同じようにアメリカ人な訳ですね。

P：その通り。

B：オーウェンス・ヴァレーに 10,000 人の日系人がやって来るのを見た時には、東洋系としてどうお感じになりましたか？

P：そうね。ほんとはあんまり考えなかったわね。一つだけ面白い事があったけど。マンザナーには、当時日系人の女友達がいたのよ。だけど、会いに行った事はないわね。

B：どういう事でしょうか？

P：うーん、どうやって彼女がそこにいるのが分かったのか覚えてないわ。多分、牧師さんにお話ししている時に、たまたま女友達がそこにいるのかしらと言ってしまったのね。だって、ロサンゼルスの日系人はあの収容所に入ったんだし。そしたら、いたのよ。名前は、グレース・タカハシ。どなたかグレースにインタビューしてるかしらね。

B：多分してるでしょうね。

P：グレースがどうなったか知らないのよ。マンザナーを出てシカゴに行ってしまったのが、消息の最後ね。

B：グレースとはどうやってお知り合いに？

P：二人ともロサンゼルスの美容学校に通っていたのよ。

B：収容所にいたグレースに連絡は取ってみたんですか？

P：取らなかったわね。あたし達は、郊外に住んでたし、小さな子供達の世話が大変でね。その頃で3人になっていたかしら。1944 年頃よ。

B：日系米人達は、日本がカリフォルニアに侵攻したら、日本軍を助けていたと思いますか？

P：いいえ、そんな事はしなかったわ。ほんとにそう思うわ。

B：その頃は、どうお考えでしたか？

P：そうした事をそんなに考えていたとは思えないわ。だけど、たくさんの…そうね、戦争が始まると、滑石会社は写真家にやって来させてね。丘の上の方に孤立していた鉱山だったから。それで、写真家が滑石会社に勤めていた人間みんなの写真を撮って、あたし達みんなに身分証明用のバッジを呉れたわ。だから、何か起こるかも知れないと疑心暗鬼だったかも知れないけど、何も起きはしなかったわね。実際、そのバッジが時折、ふいと出て来たりするのよ。

B：収容所に入っていた人達のほとんどがアメリカ市民だった事をご存知でしたか？

P：勿論ですよ。

B：彼らは不当に扱われていたと感じましたか？彼らは収容所に入れられて当然と感じましたか？　あなたもご主人と同じプロパガンダにさらされていらした。あなたの感じ方はご主人とは異なっておられましたか？

P：うーん、起きたのがあんまり昔だから、当時どう考えていたのか思い出せないわ。だけど、あの人達は、家も、友達も、持ってる物もみんな諦めなければならなかったんだから、恐らく間違ってると感じてたでしょうね。実際に、あの人達は、連行される時に、持ち物をかき集める暇さえなかったのよ。その事は、私は、後になってから読んだんでしょうけどね。だって、実際に起きた時には、日系人をどんな風に夜の間に連行していったかなんて、表に出さなかったでしょうからね。あれは全く間違っていたわ。

B：あなたの受けられた教育についてお聞きしてないと思いますが？

P：このローン・パインの町でハイスクールを出たわ。

B：史跡の銘版…マンザナーの銘版の文言についての意見をお聞かせ願えますか？

P：そうね。文言に問題があるとは思わないわ。ほんとの事なんでしょ？　あたしには、ほんとの事に聞こえるけどね。

B：銘版を置く事について、だいぶ諍いがありました。

P：誰が諍いなんてしたのかしら？
B：日系米人委員会とサクラメントの史跡指定委員会の間でですよ。
P：彼らはほんとの事を好まなかったの？
B：うーん。様々な理由からですね。きっと。ただ二つのフレーズが…
P：「強制」・「収容所」という二語が？
B：ええ。その言葉はちょっと厳しかったと考える人もいると思います。ところで、あれは強制収容所だったとお感じになりますか？
P：ドイツの強制収容所がそうであったという意味合いでは違ったわ。あそこじゃユダヤ人や何かを焼き殺したんでしょ？　だけど、ここの人達も収容所に集められたし、自由に往来も出来なかった。実際は、あの人達の中には、このローンパインのダウンタウンに出かけて来た人もいくらかいたようだけど、町中を歩き回ったりはしなかったわ。この町の住民に日系人が歩き回るのを嫌がる人がいくらかいたんでしょうね。収容所の人達は、そんなことを許されもしなかったわ。店の中に入って来たりは決してしなかったわ。でも、多分、必需品を買いに来るトラックに乗って来たりしていたんでしょうね。悪さをしようとしてたなんて思えないわ。結局、あの人達も多分収容所から出たかったんだろうし。あの人達が一度でも何か間違いを犯したなんて思えないわね。
B：ああいった事がまた起こり得るとお考えですか？
P：そこんところがまるで分からないわねえ。
B：人々はあの頃より開けて（シヴィライズド）来たとお考えですか？
P：いいえ。だけど、昔と較べたら、たくさんの人達が、今じゃ考えていることを口にするし、やりたいことをやっているわね。
B：それだから、特定の人種やマイノリティーを収容するのが今じゃずっと難しいだろうと感じられるのですね？
P：そう、もしそんなことをしようとしたなら、暴動みたいな事が起こったりするんじゃないかしらね。そうした人達の後に大きな集団が控えていたら…つまりね、20 年、30 年前には起きなかった事が今じゃ起きているのを読んでいるでしょう？
B：日系米人連隊について耳にされたことは？
P：ええ、戦後読んだ気がするわ。多分、『ライフ』か何か雑誌でね。
B：戦時中はずっと鉱山で働いておられた？
P：ええ。滑石は、戦争にどうしても必要な物資なのよ。高品質の滑石から碍子を作るのね。今でも希少物資よ。
B：鉱山はもうそこにないんですよね？
P：鉱山はあるけど、操業していないのよ。掘り尽くされたのね。
B：ご協力頂き、本当に有り難うございました。
P：どういたしまして。もう一つあるんだけど。私は、マンザナー収容所ともう一つ関わり合いがあるのよ。あそこのお医者さんがうちの三番目の子を取り上げて呉れたのよ。
B：日系米人の医師でしたか？
P：違うわ。イタリア人のお医者さんだったわ。陸軍の医者だったのに違いないわ。マンザナーに配備されていたけど、誰を診療していたのかは知らないわね。
B：その為に収容所に出かけたのですか？
P：違うのよ。子供を取り上げて呉れるはずだったシュルツ先生が、東部に呼び戻されたのね。シュルツ先生が、マンザナー収容所のその先生が自分の患者を診るように手配して行ったのよ。
P：興味深い話ですね。
B：本当にね。今思い出した話だけどね。長い間その先生の名前を覚えていたけど、今は記憶していないわ。
P：本当に有り難うございました。

（17）フランク・L・ペドノー
フランク・L・ペドノーのインタビュー。Pがインタビュイーのフランク・L・ペドノー、Bがインタビュアーのデイヴィッド・バータニョーリをさす。
B：ペドノーさん。戦時中は何をなさっていたか、教えて頂けませんか？

P：ダーウィンの近くで滑石を掘っていましたよ。
B：マンザナーがあった場所からどのくらい離れていましたか？
P：55 マイルです。
B：収容所と少しでも接触がありましたか？
P：まるでなかった。
B：だけど、接触のあったお友達とかおられましたか？　もしいたなら、収容所についてどんな事を言っていましたか？
P：私の知っている限り、収容所が閉じられるまでそこに働いていた誰とも話した事がなかった。だから、誰かが私に何か言ってたとは記憶してないな。収容所があった間にそこで働いていた誰とでも、話した記憶が全くないですね。
B：真珠湾攻撃以前のあなたの日本人に対する意見はどんなものでしたか？
P：意見なんてなかったですね。私にとっては、外国の一つというだけでしたよ。
B：彼らと接触はありましたか？
P：いいや。ああ、おたくの言っているのは、アメリカ生まれの日本人（the native Japanese）、市民権を持った日本人（the citizen Japanese）のこと？
B：そう、日系のアメリカ人（the Japanese Americans）ですね。
P：ないな。そちらともまるで接触がなかったですよ。
B：ずっとオーウェンスヴァレーに住んでこられたのですか？
P：いいえ、ここに住んで 35 年経ちます。いや、37 年かな。
B：連中がヴァレーに収容所を設置して 10,000 人もの日系人を移そうとしていることを知って、最初に何を考えましたか？
P：どう思ったか覚えていませんね。いずれにせよ、私に大した印象を与えなかったと思うよ。
B：我々は日本と戦争中だった。怖くありませんでしたか？
P：どうして怖がらなけりゃならんかったのかい？我々は山の中にいた。我々の知っているところでは、合衆国陸軍が収容所を警備していた。怖くはなかったね。思うに、そんな感情はこれっぽっちもなかった。あれだけの人間がヴァレーに移されるんだからちょっとは興奮はあっただろうが、それ以上のものではなかったな。
B：日本軍がカリフォルニアを侵略したら、日系米人は手を貸したとお考えですか？
P：いいや。
B：第二次大戦中の日系米人部隊、442 部隊について知っておられますか？　これまで聞かれたことはおありですか？
P：たくさん聞かされたよ。
B：とても勲章を授かることの多かった部隊でした。
P：読んだところじゃ、とてつもなく立派な部隊だったようだね。陸軍全体の中でも、一番死傷者が多かったんじゃなかったかい？
B：その通りです。それに、どの部隊よりも勲章をたくさん貰いました。その事が、収容されている日本人に対するあなたの意見に少しでも影響を与えましたか？　それについて耳にした時に、日系人を収容所に入れていた事が正しかったとお思いでしたか？
P：それについちゃ、いつ考えが変わったか分からないんだよ。
B：今では、間違っていたと感じておられる？
P：勿論、今じゃそう思っているよ。だけど、遡って、この月にとかこの年に考えを変えたんだと正確に指摘することが出来ないんだよ。ほら、30 年かもっと前のことを話している訳だからね。そんなに前のことを思い出すのは、厄介だろう？
B：厄介でしょうね、ええ。（笑い）マンザナーの歴史的銘版に記された文言についてのご意見をお聞かせ願えませんでしょうか？
P：良いんじゃないかな。
B：あれは実際に強制収容所（concentration camp）だったとお考えですか？
P：勿論さ。強制収容所だった。疑う余地はないよ。疑問の出る訳でもあるかい？　とても狭い地域に、10,000 人もの人間が閉じ込められたんだ。鉄条網に囲まれてね。警備兵がいた。サーチライトがあった。監獄と呼べないのは、中に家が

あったこと、窓に鉄の棒が渡してなかったからさ。それを除けば、閉じ込めておくためのものがみな揃っていたよ。連中は、狩り集められたんだし、あれは収容所だった。

B：憶測で結構ですが、あなたはあんな事が合衆国でまた起きるとお思いですか？

P：思いますよ。

B：同様な状況下で？　どのような状況下でですか？

P：どんな状況になるかは分からないよ。将来のことを考えられるなら…今は、もしかすると潜在的には当時と同じ状況であるのかも知れない。人間てのは変わらんからね。

B：アメリカ人がまたパニックを起こすとお考えでしょうか？

P：思いますね。

B：今日の個人の自由や公民権運動を眺めても、それでも再び起こり得るとお考えですか？

P：人間のやることに変化があろうとは信じておらんよ。第一次大戦中は、殆ど同じようなことをドイツ人に対してやった。連中を強制収容所に入れはしなかったが、見下したんだな。脅かしたし、笑い者にした。店は不買運動にさらされたしね。で、今度は次の戦争が起きると、日本人に何が起きたかさ。ドイツ人も、第二次大戦中には散々な目に会わされたよ。強制収容所には入れられなかったが、第一次大戦中に受けたのと同じ仕打ちを大分されたね。遡って、ドイツ人のことの聴き取りなんかはまだしていないのかい？

B：ほんのちょっとですね。どうも、本当に有り難うございました。

P：これで私に会いに来た用は足りたかい？

B：ええ。十分です。有り難うございました。

考察と結語

一組の夫妻と一人の女性が本稿のインタビュイーである。夫妻の妻の方が中国系である。尤も、彼女にしても、自分が、日本人と同じアジア人なのだという意識を持っている訳ではない。

（15）で取り上げたアンナ・ケリーは、OHC によれば、1910 年頃の生まれ。収容所建設当時は、保険会社の応急手当係であった。インタビューは、アーサー・A・ハンセンとディヴィッド・J・バータニョーリによって、1973 年 12 月 6 日、カリフォルニア州インディペンデンス、エドワードストリート 6345 にあるケリーの自宅で行われた。50 分のテープ他が残されている。

また、アンナ・ケリーのインタビュー頁中には、"Some Sidelights On the Entire Valley Project"とタイトルの付いた新聞記事の切り抜き（1942 年 3 月 6 日付け『インヨー・インディペンデント』紙付録から）が挿入されている。Japanese Reception Center という語が、文中に用いられている。

木曜 4 時 30 分に連邦土木局で入札される、提案されているマンザナーの「日本人受け入れセンター」（Japanese Reception Center）の前見積もりで、6,300,000 フィートの木材を必要とすることが判明した。引き渡しは、30 日以内に完了されねばならず、木材の運搬のみでも、次のようなものを伴うことになる。

1）木材運搬には、平均してまるまる 18 トンの荷を運べるトラックないしトレイラーが 500 台必要となる。

2）鉄道で運ぶとなると、一車輌あたり平均して 25,000 フィート載せられるとして 252 輌必要となるが、これは長さにして 2 マイルを超える列車になる。

3）6,300,000 フィートの木材を使えば、広さ 2 フィートの板敷きの歩道を、マンザナー受け入れセンターからニューメキシコ州ギャロップまで敷けることになる。

木材だけでなく、屋根を葺いたり建設に使うペーパー、パイプ、電気製品、衛生設備、金物類、サッシやドア、釘などが、相応に必要になってくる。例えば、釘だけでも、およそ 2,100 ケッグ［keg；釘を入れる樽、重量単位としては 100 ポンドに相当するとされる…池田註］、総計 105 トンに達する。

なお、(15) のアンナ・ケリーのインタビュー中には、以下のような部分がある（Bは、インタビュアーのバータニョーリ。Kは、インタビュイーのケリー）。

B：他の人達から耳にしたのですが、日系米人のたくさんの者が、アメリカ市民から護られているというので、収容所に入っているのを喜んでいたそうですね。

K：その通りね。

これは、「『ジャップの収容所』紹介―第Ⅲ部」の末尾に、「付記」として記した以下の文章にも通じる。

…日系人の強制収容を、真珠湾後の合衆国社会からの日系人への憎悪や迫害から護るためであったとする「合理化」（本稿でブランソンも「それに一つには彼ら自身の安全のためもあったんだね」と述べている）は、現在も一般のアメリカ市民の間に屡々見受けられる。これは、日系人の側からも発せられるが、以下にその好個の例を紹介する。但し、日系人の側からの発言が、上の「合理化」を直ちに正当化するものとは勿論ならないであろうが。

…早く、キャンプに、行きたかった。

イノチが、あぶない。マゴマゴしてはおれん。

石を、なげられて、窓のガラスが、みんな、われた。

このヤローと、おもーたが、どーにもならん。

汗ミズたらした、畑のことを、かんがえると、涙がでた。…

…1942 年 5 月 15 日、よーやく、カリホーニヤの、日系人は、汽車に、乗って、行った。

私らは、オーシャンサイド駅から乗った。行先は、ワカラナイ。

汽車には、黒いカーテンが、つけて、あるから、外は、見えない。…

（新藤兼人の実姉は、開戦時カリフォルニア州エンシニタス（Encinitas）在住であった。戦後に新藤に姉から寄せられた手紙から引用。新藤兼人『祭りの声－あるアメリカ移民の足跡－』岩波書店、昭和 52 年、所収）

ただし、『共立薬科大学雑誌』本号に所収の『山形からの一北米移民―データ、娘と次男の回想及び自筆所感―』、その「本文」中の＜アイリス・フクタキ夫人（Mrs. Iris Fukutaki）による回顧－その 2＞の中に、下のような痛烈な一文が挿入されていることにも思いを馳せるべきであろう。

…日系人は、彼ら自身の安全のために収容されたのかも知れないよという説明がよく聞かれたものです。私自身の経験から言えば、見張り塔に立つ哨兵は、鉄条網の外にでなく、私たちに銃を向けていました。…

（16）で取り上げたベシー・K・ペドノーは、OHC によれば、1919 年の生まれ。三世の中国人である。インタビューは、ディヴィッド・J・バータニョーリによって、1973 年 10 月 4 日、カリフォルニア州ローンパインのフランク・L・ペドノーとベシー・K・ペドノー夫妻の自宅で行われた（郵便は Box 455, Lone Pine, California, 93345）。ベシー・K・ペドノーについては、15 分のテープ他が残されている。

（17）で取り上げたフランク・L・ペドノーは、OHC によれば、1915 年頃の生まれ。フランクは、コーケイジァンである。インタビューは、ディヴィッド・J・バータニョーリによって、1973 年 10 月 4 日、カリフォルニア州ローンパインのフランク・L・ペドノーとベシー・K・ペドノー夫妻の自宅で行われた（郵便は Box 455, Lone Pine, California, 93345）。フランク・L・ペドノーについては、10 分のテープ他が残されている。

2004 年 9 月 11 日、12 日に立教大学で開かれた JOHA（Japan Oral History Association）第 2 回大会は、基調講演者としてアーサー・A・ハンセン教授を招いて行われた（同大会には、Densho : The Japanese American Legacy Project を主催する、日系三世の Mr. Tom Ikeda も、ワークショップの講師として参加された）。手許の handout を眺めると、ハンセン教授の力強い語り口が甦ってくる。また、ハンセン教授と個人的に話す機会が、二回にわたって得られたのは幸運であった。更に嬉しいことに、"*Camp and Community*" の revised edition がちょうど印刷中だからと言われ、帰国した後早速二冊も送って下さった。旧版と比べて内容に大きな差はないが、新版 vi 頁の‘Note to the 2004 Edition’から引用すれば、以下のような点が異なっていると言えよう。

…Camp and Community のこの版から得られる情

報は、実際には、1977 年版からと同じだと言える。一番の差は、今では時代錯誤的になってしまった "Publisher's Note" を削除したことだ。修正した点としては、最も重要なものは、迂闊にも省略してしまっていたオーウェンス・ヴァレーの地図と、索引［6 頁にわたっている。人名、地名、事項等が、subentry まで用いて記載されている…池田注］とを付したことであろう。他に目につくものとしては、数枚写真を入れてみたこと、表紙のデザインを変えたこと、初版の書評家による好意的な宣伝文を裏表紙に並べたことであろうか。…

（2005.3.31）